

日本舞踊における足の技法・ オコツキについて

藍 本 彩

日本舞踊では、足使いによって、性別、役柄、世代などを、かなりの程度表わすことが可能とされている。

又、様式化された型としての足使い「道中」「送る」「すべる」「六方」などについても、先行研究において多く言及されている。

そこで、本研究では、「オコツキ」という足使いを中心とした技法をとり上げて観察したいと思う。

オコツキとは『歌舞伎舞踊用語。舞踊やしぐさの中で、けつまずくようにがっくりとすることをいう。……音楽にあてて見物の気を引くところや、花道の出や引っ込みのきっかけに柝の入るところなどで用いられる。道行の出には必ずといってよいほどおこなわれる。』⁽¹⁾と解説されている。

では、この「オコツキ」が、実際の舞踊の中で、どういう場面に使われているか、その用例を列挙してみよう。

尚、振については、多く現行の歌舞伎の興行で使われるものをとり上げる。

比較的単純な、定型パタンのように使われる場合として、「老年・老境・老人」を示す、そして「酔態」がある。

▷ 老年 長唄「浦島」、清元「流星」、「山姥」ものなど、老人の覚束ない足取りを強調する場面によく使われる。

▷ 酔態 長唄「まかしょ」、清元「鳥刺し」、「猩々」ものなど、歌詞に即いて酔ってよろける足取りを強調する箇所によく見られる。

又、驚き、屈託、葛藤など心理的側面を強調する時にオコツキが使われる。

▷ 心理描写 清元「隅田川」で、我子の幻影を追い求める場面、長唄「二人椀久」、清元「保名」などで、恋愛の対象を追う、追憶するなど、物狂おしい心理を強調する時に使われる例が多い。

次に、一種の状況説明に使われる場合がある。もっとも、単なる状況説明とは言い切れず、多くの場合は、心理（恋愛）的要素がその状況には付随している。

▷ 状況説明 長唄「汐汲」の中で、水を汲んで桶が重くなった。同「島の千才」で、若水を汲んでいると鶯の声が聞こえてきたという初春ののどかな情景描写などがある。

次に、動きとしての役割、機能的側面から、オコツキを観察してみたい。何故、そこでオコツク

のか、技法としての必然性という観点である。

機能も複合されて使われる場合が多いので、どの範疇に入れるか判断が困難であるが、とりあえず、一つの視点を提起する意味で用語を挙げる。

尚、極まり、見得など静止の増幅効果は、殆どどの用例に見られるので、その意味での「強調」は自明のこととして、今回は取り上げない。

- A 契機（きっかけ） 動きのフレーズ・一まとまりの ① 発端、② 終止
- B 転調（舞踊のトーンの変化）
- C 接続（並列）
- D 強調（リズム的效果）

以上の概念、用語は、舞踊家であり、歌舞伎の振付師でもある尾上流家元・尾上菊之丞師に御助言を頂き、VTRの演者としても、御協力を頂いた。

オコツキの用例（VTR）

- 1) 長唄「浦島」後に引かるる恋衣 A-②
- 2) 同「まかしょ」出 A-②、「引き出してくる酒の酔」 A-②
- 3) 清元「保名」「一人明かすぞ悲しけれ」③ A-② B, D
- 4) 同「隅田川」「いとど心の物狂い」④ A-① ⑤ C, D
- 5) 長唄「二人椀久」「じゃらくら悪じゃれの」⑥ C, D
- 6) 清元「山姥」「松も杖つく老の坂」⑦ A-①, B
- 7) 清元「子守」「憎い鳶づら油揚げさろうたオオノ」 C 以下省略

このように、オコツキという技法は、様々な演目に見ることが出来る。オコツキ自体は、見た目に分かり易い単純とも言える技法だが、その意図するところ、担う役割は、中々複雑であり、心理、状況など様々に重層、複合された要素を集約して表現する万能薬的な技法と言えるだろう。

又、舞踊は息使いが肝要とは周知のことであるが、息を抜く為の工夫にもなっている。

日本舞踊における美意識の面から言えば、階調を破る、破調、乱調の美的効果、アンバランスのバランス感覚などが窺える。

オコツキを明確に使うか、抑制して使うか、勿論、作品、役柄にもよるが、その活け殺しの利いた使い方によって、演者の技倆、感覚なども露呈される場合もあり、鑑賞する際の一つのポイントにもなりうる。

様々な用例を集めて、精緻に意味・機能を分析すれば、日本舞踊の表現・構造などを考察する一つの手掛りになるのではないかと考えている。

（注）郡司正勝編（1977）日本舞踊辞典
東京堂出版